

大遠忌の歩みと その時代

第二回 四〇〇回・四五〇回大遠忌のころ

親鸞聖人四〇〇回大遠忌は、本願寺十三世良如宗主りょうじよしゅうしゆの時代、寛文元年かんぶん（一六六一）三月十八日から厳修されました。このころすでに徳川家康が征夷大將軍となった慶長八年けいちちやう（二六〇三）から半世紀以上の年月がながれ、幕府の基盤固めはようやく落ち着きつつある段階となりました。とはいえ、たくさんの政治権力の交替を体験してきた京都のまちにとつては、徳川はあとからやってきた権力にすぎないという印象も残っていた、そういう時代でもあったのです。

このようなか、四〇〇回大遠忌にさきだつて、大谷廟堂おおたにびやうどうの整備がなされたことは、このころの大きな事業として注目されます。文永九年ぶんえい（一二七二）に親鸞聖人の門弟たちによって建てられた大谷廟堂（現在の崇泰院そうたいてん付近）は、本願寺の発祥の基もととしてたいせつに守られていました。政権を取った徳川家康によつて、「南谷みなみだに」とよばれていた現在の地に移転を余儀なくされました。ところがこのときすぐには、仏殿ぶつでんや廟所の本格的な整備にまでは至っていません。なかつたよう

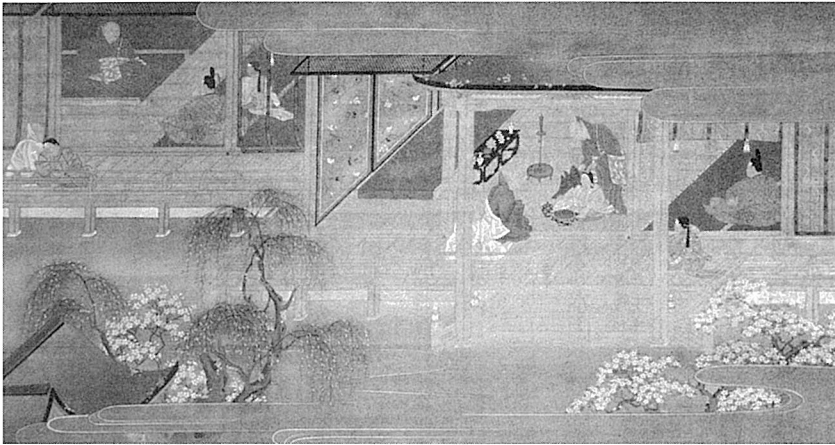
す。

大遠忌を翌年にひかえた万治三年（一六六〇）の六月になつて、大谷廟堂の整備がにわかには本格化しました。翌年三月に落成、三月十六日には新しい仏殿に木仏本尊が安置され、お斎おきなどが行われたという記録が残されています。仏殿の背後に親鸞聖人の廟所が整備され、その左右には顕如上人けんじよ・准如上人じゆんじよの墓所も整えられました。

四〇〇回大遠忌の様子は、本願寺史料研究所保管の「御開山様ごかいざん四百周年忌御法事」と題された冊子にみる事ができます。本願寺では三月十八日から二十八日にかけて法要が執行され、ひきつづき津村別院つむら・堺別院でも執行されたことが記録されています。また、

同年十一月十七日には、良如宗主は当時の新門であつた寂如上人じやくじよとともに新しい大谷廟堂に出向かれ、法要がいとなまされたのです。

またこのころ、徳力善雪とくりきぜんせつ（一五九九～一六八〇）の手になる「親鸞聖人絵伝えでん」



徳力善雪作「親鸞聖人絵伝」第一幅 寛文元年（1661）

が製作されたことも注目されます。徳力家は本願寺絵所をつとめた画師で、そのなかでも三代の善雪は、現在の御影堂障壁画を描いたことでも有名です。『大谷本願寺通記』という文献によりますと、

四〇〇回大遠忌のときの記事に、「四幅で描かれている祖師伝を八幅に仕立て、徳力善雪にこれを描かせた」とあります。善雪の描いた絵伝は縦三メートルを超える壮大な掛軸で、現在も報恩講の際には御影堂に掛けられます。

正徳元年（一七一）の四五〇回大遠忌のころは寂如宗主のもとで、儀礼や法要の内容が急速に整備されていった時代です。法要にさきだってお参りの方々を対象に法宝物の展観がおこなわれたことは特筆すべきことでしょう。このときは寂如宗主みずから「鏡御影」をはじめとする四十六点をえらび、陳列に当たられたといわれています。展観はこれ以後大遠忌恒例の行事となっていきました。このときはあまりにも多くのひとが詰めかけ、三月九日から十三日の四日間、閉幕という事態となったので、五〇〇回忌には展観は前年に前倒しされ、このころからお待ち受けの行事もしだいに盛大なものへとなっていきました。

この当時どれぐらいのひとびとが本山

にお参りになったか正確な数はわかりませんが、四五〇回大遠忌の場合、お斎を相伴したひとだけをかぞえても、一万二千三百五十二人にのぼっており、いまよりはるかに交通の不便な江戸時代にあつて、京都の本願寺がおおくのひとびとのよりどころとなつていたことがうかがえます。このようななかで、現代へとつながっていくような近世期の大遠忌のわたしがしだいに整えられていったのです。

（本願寺史料研究所研究員 佐藤文子）